
私の卒業

月代奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の卒業

【Zマーク】

Z2366BA

【作者名】

月代奏

【あらすじ】

この日、私はいろいろなものから卒業する。

2008年作品

「痛かった」

終わってからの第一声は涙で滲んでなかつたと願いたい。でも、それはきっと都合がいいと思う。実際に一番近くで聞いている私がとても泣きそうで、震えていたんだから。相手に聞こえないわけがない。それを分かっているから田中君は私のほうを見ないでるんだ。気づかない振りとまではいかなくとも、私の意図を汲んでくれたようだ。

「思つたよりもあつけなかつたね」

田中君の男の子にしては甘めなハスキーワードが耳に染みる。教室から廊下のほうを眺めて、裸の背中を丸めて机の上に座つてゐる。窓から差し込む夕日が私達の影を伸ばす。緩やかな時間が私達を包む。

「そうだね」

どれくらい待つてから呟いたんだろう。時間の感覚が曖昧になつてゐる。いつまでもこんなスカート一枚の姿ではいられない。私達のセックスが見つからなかつたのは単に運が良かつただけなんだから。「もう着ちゃうの？」

私が起き上がる気配を掴んだんだろう。田中君は私のほうを振り向いた。田の光に、胸板が微かに煌いてゐる。それが汗だと分かつて、急に恥ずかしくなつてきた。行為の最中は恥ずかしさよりも痛かつたし、終わりの頃は良く分からなかつた。気持ちよくなつてきただけで、結局は痛みのほうがあつた。太ももに手をやるとぬめつとした赤いものがついた。これが噂の破瓜の血つてやつ、か。

「そりや、着るわよ。恥ずかしいし」

「教室であるほうがよっぽど恥ずかしいと思つけど」

苦笑いして、田中君は学生服に手を伸ばす。もう彼のあそこを包んだトランクスは膨らんではない。あれがさつきまで、入つてたなんて。

「やっぱり信じられない。人体の神秘」

「神秘、だね」

丸首シャツを着て、ワイシャツを着てからボタンを一つ一つつけしていく。もう肌色なんてほとんど見えない。てきぱきといつもの田中君に戻っていく。

いつもだつた田中君に戻っていく。
もうこの姿を見ることはない。私達は今日、ここを出て行くんだから。

「着ないの？」

制服に着替えていく田中君を見ていて自分がおろそかになる。まだ上半身はブラジャーを着けているだけの姿。これから机の上に広げていたシャツとセーラーの上を着るだけ。ああ、その前に血を拭かないと。ハンカチ持つてたっけ……。

「なんか、変わった？」

スカートからハンカチを取り出して内股を拭ぐ。ぬめつとした赤いものが付いたけれど、そこまで量は多くないようだ。安心して服を着る。

シャツとセーラー。これを被れば高校生の私に戻る。そして、もう高校生には戻らない。

「変わった？」

「え？」

田中君が私に尋ねてるんだと気づくのに遅れた。一人しかいないんだから当たり前じゃないか。でも、何が変わったんだろう。

「多分、変わらない」

思つたとおり答えた。

変わらない。明日から高校には来なくてよくて、私達は新しい場所に進む。もうこの教室も、ここで見た夕日も、一人で初めてを無くしたこと、全部全部思い出になる。

「私達で何人目かな」

「年号が変わってから、初めてを卒業したつてカップル？」

田中君はする前に私が言つたことを覚えていたらしい。

卒業式を控えた昨日、日本の年号が変わった。

今の天皇さんが亡くなつたところで、年号が変わるらしかつた。今から数十年前に昭和天皇つて人が亡くなつた時に平成になつて、昨日、平成からまた変わつた。私達は平成が終わつて初めての卒業生になるんだと何となく嬉しかつた。

二十一世紀初めての卒業生とか、二十一世紀初めての子供とか昔は騒がれて、今も年号が変わつて初めての卒業生というわけで騒がれてる。何年経つても人間つてあまり変わつてないよね。

「時代からの卒業つてかつこいいよねなんか」

「俺達は更にいろいろ卒業したしね」

平成からの卒業。新たな時代への入学。

私達はちょうどその時期だつたんだろうけど、これからもずっと

卒業と入学を繰り返して、行くんだろうな。

「じゃあ、俺は、もう行くよ」

私達はいろんなものから卒業をした。

「うん」

声は震えていないうだらうか。ちゃんと田中君を見送っているだろうか。

泣いてなんかいない。悲しんでなんかいない。私達は卒業する。高校生から、子供から、時代から。

でも、嫌だよ。

「嫌だよお

嫌だ。嫌だ。嫌だよ。

「田中君！」

田中君からも卒業しないといけないなんて、嫌だ。

「ずっと田中君といたいの！ 卒業なんてしたくないよ。ずっと一緒にいてよ！ だつて」

もう涙で視界が歪んで、見えない。田中君が見えないよ。

「好きだつたから、今日誘つたんだもの！」

本当に自分勝手で嫌になる！ 今まで告白できなかつたのは私の弱さが原因なのに。卒業式で勝手に教室に連れ込んで、勝手にエッチして。

離れ離れになるなんて、嫌だ。

違う大学で違う時間を過ぐしていくなんて、嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

「俺だつて、お前のこと好きだから誘われたんだぜ」

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

「つて、え？」

今、なんか聞こえた。田中君はなんて言った？

俯いていた顔を上げて、涙をちゃんと拭いて田中君を見る。夕日がちょうど田中君の顔を照らしていてあまり見えなかつた。でも、綺麗な茜色をしていたと思つ。

「俺だつてさ、お前のこと好きだつたから誘いに乗つたんだつて。好きじやない人と、あんなことしたくないし」

田中君は頬をぽりぽりかきながら呟く。私から田を逸らしながら。「こきなり遠距離になつちゃうけど、さ。付き合つてくれないか？」

「順番、違う気がする」

「そりや、最初から順番違つしな」

田中君のは多分告白だ。でも、私もそのままこの全部飛ばしていくなりだつたから出来出来、なかも。

でも嫌だつた。やつぱり、言つて欲しい。

「付き合つてくれないか？」

「やだ」

だから、言つてやつた。田中君は思い切りきょとんとして、私を見た。

「順番どおりじやなあや、嫌だ」

「わがままだなあ」

本当にわがままだ。愛想つかされても仕方がない。ほんと、嫌な女。

「君が好きだ」

でも、田中君は。

「付き合つて欲しい」

「こんな私でも、好きらしい。」

「……うん。私も大好き」

また涙がこぼれただけれど、今度は悲しいからじゃない。田中君から伸ばされた手を私は掴んで、机の上から降りる。

「……っ」

まだ後遺症が残つてるらしい。股の間が少し痛い。顔を見ちゃつたからか、田中君が心配そうに覗き込んできた。

「ごめん。まだ痛い？」

確かに痛い。でも、痛くない。だつて、この痛みは私たちが繋がつた結果だもの。心も身体も繋げてくれた結果なんだもの。

「痛くないよ」

私達になつてからの第一声は涙で滲んでなかつたと願いたい。きっと平成が終わつてから初めてのカップル。出発は笑顔で行きたい。

「これからよろしくお願ひします」

「うん」

繋いだ手は、ほんのり暖かかった。
制服を脱いでもきっと、繋いでいける。

(後書き)

制服を脱いでも、さつと繋いでいけると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2366ba/>

私の卒業

2012年1月5日23時45分発行